

吉田ヒレカツの音楽展望

[註]吉田ヒレカツ

一昨年没した高名な音楽評論家吉田秀和氏とは縁もゆかりもない一般人のペンネーム。某ウェブサイトにて、思い出したように演奏会批評などを投稿している。

ブラームス：ドイツ・レクイエム（2台ピアノ版）

2014/1/13

東京エレクトロンホール宮城

村元 彩夏（ソプラノ）

小森 輝彦（バリトン）

平井 良子、東浦 綾郁（ピアノ）

佐々木 正利指揮

仙台宗教音楽合唱団、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

ブラームス：ドイツ・レクイエム（オーケストラ版）

2014/5/18

川内萩ホール

ガハプカ 奈美（ソプラノ）

篠部 信宏（バリトン）

村田 睦美（ピアノ）

早川 幹雄指揮

ヨハネス・キネン・オーケストラ

合唱団 Épice

今年に入ってから、ブラームスの「ドイツ・レクイエム」という名曲を、2度も生で聴く機会があった。それぞれに全く異なる情緒をもってある種の感慨を与えてくれたものだから、ここにしたためてみようと思う。とは言っても、1度目のものはもう半年近く前に聴いたものなのであるから、はたして細かいところまで憶えているかしらん。

それは、今年の、まだ松の開けぬうち、1月13日に開かれた演奏会であった。合唱団は仙台宗教音楽合唱団と、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインという2つの団体の合同、なんでも、どちらも指導に当たっているのが同じ方で、このように同じ演目で仙台と盛岡の双方で演奏会を開いているのだということである。この日も、指揮者はこの指導者、佐々木正利氏であった。

会場は「東京エレクトロンホール宮城大ホール」という、なんとも日本語としては居心地の悪い大層な名前の付いているところで、初めに知らされた時にはいつの間にこのようなものが出来たのかと訝しがったものであるが、良く聞いてみるとそれは以前からあった宮城県の県民会館のことであったというのではないか。どうやら、近頃はこのように、地方のお役所が所有している物件に、企業の名前を付けてお金をもらうということがごく普通に行われているようである。これは、私のような老人には、到底理解しがたいものだ。

この会場には3階席まで設けられているはずであったが、入ってみると3階以上は閉鎖されていて、客を招き入れないようになっていた。確か、ここは1500人ほどの収容人員だったように記憶しているが、主催者はそれほどの人は入らないと見込んで、敢えてこのような措置を取ったのであろう。しかしながら、開演間際になるとどんどん客が入ってきて、1階席も2階席もほぼ満席になってしまったのではないか。3階を開けなかったのはとんだ誤算だったと言わざるを得ない。おそらく、1000人近くは入ったのではないだろうか。

「ドイツ・レクイエム」だけでは一晩の演奏会としては短すぎるとの判断であろう、まずシュッツの無伴奏のモテットが演奏されていた。舞台上の上の合唱団は総勢140人ほどであろうか、この人数でシュッツを歌う

とは何たる無謀な試み、と思ったが、これが歌い出しから大人数を感じさせないようなとても繊細な音楽が聴こえてきたのには、いささか驚いたものである。とても軽やかな歌い方であり、ポリフォニーでも、リズムカルなホモフォニーでも、自由自在に躍動感が伝わってくるのだから、これはたまらない。始まりから良いものを聴かせてもらえた。

であるから、中核の演目である「ドイツ・レクイエム」も、大人数の威力が最大限に感じられ、繊細な部分から力強い部分まで、とても振幅の広い演奏を楽しむことが出来た。そして、表情付けの細やかなこと。これは、オーケストラではなく、ピアノ2台の伴奏だったからかもなのかもしれない。おそらくオーケストラが入ったのでは、これほどのていねいな演奏は出来なかったのではないかしらん。それでもって、ドイツ語の発音のきれいなこと。

そうは言っても、やはりオーケストラ版を聴き慣れていると2台ピアノというのには少なからぬ違和感も抱かざるを得なかったのも事実である。何と言っても、木管楽器が最後にきれいな和音を伸ばして終わるのがこの曲の醍醐味の一つであるのだが、音が伸ばせないピアノではそれは決してかなわないことなのだから。この合唱団がこの演奏会そのものの充実した姿で、オーケストラと一緒に歌ったところを、ぜひとも聴いてみたいものだ。



もう一つの「ドイツ・レクイエム」の演奏会は、つい先日川内萩ホールで行われた。ちょうどその日はこの町では大きなお祭りがあったということで、客の人数が今一つだったのが残念であった。特に2階席などは、後ろの方には全く客が座っていないという状態であった。舞台を見ると、合唱団用の椅子が並べられている前に、ピアノが設置されているではないか。確か、これまでの告知では演目は「ドイツ・レクイエム」だけということだったはずであるが、やはりさすがにそれでは気が引けたと見えて、急遽演目を追加したのであろうか。渡された小冊子を見ると、確かにそこにはメンデルスゾーンやリッヒャルト・シュトラウスの歌曲の名前が見られるから、それらを合唱に編曲したもので聴かせてくれるのであろう。

ところが、開演が近づいたころになって、2階席の空席のあたりに、舞台衣装に身を包んだ合唱団員らしきものが座っているではないか。確か、この演奏会では、正規の団員以外にブラームスを歌うための団員を臨時に募集していたと聞く。それならば、まず正規団員のみによって、シュトラウスなどが演奏されるのかしらん。

しかし、それは全くの勘違いであった。舞台に登場したのは「ドイツ・レクイエム」の独唱者であるソプラノ歌手だったのである。ここでは合唱ではなく、本来の歌曲が歌われるのであった。前もって何の案内もなかったのに、これには驚いてしまった。しかし、ブラームスの大曲を聴く前に、このような爽やかな歌曲を聴くのも一興かもしれない。開催者の粋な計らいを楽しませてもらおうではないか。なにしろ、リッヒャルト・シュトラウスの歌曲が生で聴ける機会など、そうそうあるものではない。ただ、この歌手は音色に斑があり、音程もなにかピリッとしていないところがあるので、文句なしに楽しめた、というわけにはいかなかったのが惜しまれる。

肝心のブラームスでは、待望のオーケストラの伴奏による合唱が聴けることになる。このオーケストラ、名前はどこかで聞いたことがあるものを振ったのではないかと、という正体不明の団体であるが、小冊子にある演奏家の名前を見ると、ほとんどは仙台フィルの団員であるようだ。一つ気になるのが、ブラームスを演奏するにはあまりに弦楽器が少ないことである。その内訳はというと、第一ヴァイオリン、第二ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロがそれぞれ4人、コントラバスが3人というものである。言ってみれば室内オーケストラ並の編成なのであるが、それにしてもこれでは少なすぎはしないか、という不安がよぎる。というのも、この曲の最初などはしばらくヴァイオリンの出番がなく、低音弦楽器のみの演奏が続くのだが、そこではヴィオラは2声部、チェロは3声部に分かれることになるので、1つの声部を1人か2人で演奏することになってしまうからである。案の定、この日の演奏では、そこからはブラームスには欠かせない重たい音色などは、全く聴かれることはなかったのである。

しかし、そんな伴奏が一瞬途切れたところに出てくる「Selig sind」という合唱の響きの、なんと美しかったことであろう。この合唱団が持っている純粋なハーモニーの美しさは、ここでも健在であったようである。オーケストラも、弦楽器こそ物足りないものの、管楽器はしっかり人数分の団員が揃っているのだから、安心して聴いていられる。フルートなどは、もう少し抑えた方が良かったのではと思えるところもなくはないが、その魅力ある音色が合唱と絡み合うと、至福のひと時に酔いしれる瞬間も確かにあったように思える。おそらく、ここで指揮者が求めたのは、70人弱というそれほど多くない合唱団との均衡を図るための、あえて少なめの弦楽器による室内楽的な音響だったのではないだろうか。それは、もしかしたらこの曲本来の姿からはやや遠いものであるのかもしれないが、この合唱団の持ち味を生かすには格別の方策ではなかったかという気がしないでもない。先ほどの大きな合唱団のものとはまた異なった、この曲の別の魅力が味わえた演奏会であった。

